

吉祥天女様に願いを込めて

令和四年一月法話 薬師寺 管主加藤朝胤

令和四年壬寅（みずのえとら）歳

元号 大化 六四五 令和 百八十六

五行 木 火 土 金 水

十干 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸
十二支 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

皇紀 二六八二年

佛教紀元 二五〇八年 衆聖点記

西暦 二〇二二年 デイオニシウス・エクシグス（四七〇〜五四四頃）

西暦表記は八世紀頃に定着

吉祥悔過

萬民法樂	天下泰平	五穀豊穰	風雨順時	国家安穩
除災招福	身体健全	無病息災	息災延命	病氣平癒
交通安全	安産祈願	良縁祈願	厄難消滅	家運隆昌
商売繁盛	事業繁栄	開運招福	家内安全	学徳増進
受験合格	諸願成就			

金光明最勝王経 大吉祥天女品

神護景雲年間（七六七〜七七〇）

宝亀二年（七七一）

国宝 吉祥天像 麻布着色 額装

縦53・0cm 横31・7cm 奈良時代 八世紀

薬師寺は、第四十代天武天皇が皇后の病氣平癒を願って発願され、その遺志を受け継いだ第四十一代持統天皇が本尊の薬師三尊像を開眼されました。その後平城遷都に伴い藤原京より平城京に移された千三百年前の白鳳文化を伝える伝統ある寺院です。

薬師寺には、わが国に伝来する佛画の中で小画面ながら独立した日本最古の佛画

「吉祥天像」が伝来しています。

この吉祥天像は一般の佛画と異なり、向かって右方に穏やかに歩みを進めるように描かれていて、その衣の裾は風になびいているような動きのあるお姿です。両手は前に差し出され、左手には神通力の特徴の持物である紅い如意宝珠を持し、右手は伏せて胸前に添えられています。

お顔は太い眉や肉付きのよい頬、引き締まった口元、眉目の特徴をはじめ、美しい髪際の毛描きや頸筋の描き方等、唐の影響を受けた天平美人をそのまま写したように豊満かつ艶美な姿です。

ふくよかに表現された肢体には多彩な衣装を身に着け、羅のような布をなびかせ截箔や縹縹彩色を併用して宝相華文・四菱文・宝尽文等の彩色文様が多用されています。

作画は、目の細かい麻布に白下地を施し、淡墨で下描きして彩色し、截箔を置き更に細筆で書き起こしたもので、彩色部分の全体にわたって半透明の物質（荏胡麻か蜜蝋か）が上塗りされ顔料の剥落止めを果たしているようです。その為千二百五十年を超えた今でも鮮やかな色彩が残されています。

吉祥天は古代インド神話に登場するヒンズー教の女神「ラクシュミー」のことで、佛教に取り込まれ福德の神として篤く信仰されてきました。

吉祥天の功德は「金光明経」や「金光明最勝王経」に説かれており、悔過懺悔行を通して、除災・増益を願い、国家安穩・五穀豊穰・天下泰平・風雨順次を祈念するものです。悔過とは日頃犯した罪を佛様の前に懺悔して除災招福を祈願するもので、朱鳥元年（六八六）以来奈良の大寺では毎月勤められました。中でも吉祥悔過は、神護景雲元年（七六七）正月に諸国国分寺において恒例化されたものです。薬師寺における吉祥悔過法要は、大晦日より七日に至る一ヶ七夜は休丘八幡宮で勤められ、翌八日より十四日の一ヶ七夜は金堂に於いて法会が営まれました。この法会は光仁天皇の御願により宝亀二年（七七一）より懈怠なく勤められ、現在に至っています。